

松島まつしま

岩溪袁川いわたに せん

水寺すいじ茫茫ぼうぼう日暮にちぼの鐘かね

驚涛きやうとう万丈ばんじやう詩胸しきやうを盪うごかす

海竜かいりゆう窟いわやに帰かえつて金燈きんとう滅めつす

雨あめは余腥よせいをおく乱松らんしようにいる

【作者】岩溪袁川(一八五二—一九四三年)(嘉永五年—昭和十八年)・岩溪晋(ススム)・明治・大正時代の漢詩人。但馬(兵庫県福知山)の人。儒者岩垣月洲の門人であった岩溪達堂の子。名は晋、字を士讓、袁川はその号。別号を半風瘦仙と号す。幼時、父に素読を学ぶ。明治六年上京、森春涛の門に入る。本田種竹・森槐南と親交があり、晩年、国分青厓とともに詩壇の双壁と称された。春涛没後、關澤霞庵の「夢草吟社」に出入し詩人としての地歩を確実にした。槐南没後は国分青崖と並んで詩壇の御所であった。資性恬澹にして超脱、気骨ありといわれる。杜甫・白楽天を宗とした。二松学舎の教授、芸文社の顧問を兼ねた。弟子に土屋竹雨がいる。昭和十八年三月、九十二歳で没した。著に『袁川自選稿』5冊などがある。「山陰老書生袁川晋」の下に、白文の「岩溪晋印」、朱文の「袁川」の落款印が押されている。

【語釈】\*松島：宮城県宮城郡、仙台湾の支湾一帯の景勝地。二百六十余の小島があり、日本三景の一つ。\*水寺：瑞巖寺のこと。\*茫茫：広く遠いさま。\*驚濤：さかまく大波。怒濤。\*盪詩胸：詩情を激しく起こす。「盪」は揺り動かす。\*窟：いわや。岩穴。竜の住む岩あな。\*金燈：金色に輝く灯り。海中の鬼火で竜が捧げるといふ。\*余腥：あとに残るなまぐさい臭気。竜の体臭のなごり。\*乱松：入り混じっている松。秩序なく生えている松。

【通釈】海辺の寺(瑞巖寺)の夕暮れの鐘が広々と果てしない海上に響きわたり、さかまく万丈の大波は、わが詩情を激しく揺り動かす。海竜もいわやに帰って、かがやく竜灯も消えてしまい、真つ暗な夕闇を、雨がなまぐさい竜の臭いのごりを送って、島々の入り乱れた松の木立に吹き込んでいく。